

三流の論

(水谷静夫：数理言語学者)

「論」と言ひながらこれは学問的な論でない。従って論証も欠く。研究を業とした者の感懐だ。

人をやたらに第何流と格づけするのは余りよい趣味とは申せまいが、時に便利なことも争へまい。一流から三流までが普通に使われる。時代の寵児を一流と見るのが不適當な例は屢々ある。第一流の研究者と呼んで然るべきは、その人の研究が新たな時流を起こしたことにより、少なくとも同世代以降の相応の時期の研究者がこれを度外視してはその分野の仕事が出来ない、それほどの人だ。こゝで大切なのは後半でなく、当の学問分野に新たな paradigm を作ったことの方だ。

すると二流とはその域にまでは達しないが、例へば時の paradigm に乗る整備に成功した類ひの業績で世界に一往は名の知られた者の謂ひであり、三流は「まあ学者やってます」といったところーと思はれる。「四流」などは三流にも劣るとの特殊な修辭としてしか使はれまい。

しかしこの見方は研究といふ長期活動の dynamics を反映してゐない。私の実感はかうだ：－

研究者は誰も、初め五流である。学問の性質にもよるが人文系ではこの期間がかなり長い。そのうち、世間の評判とは別に、四流か三流かになる。多くはこれで止まってしまふ。時に四流から二流に進む者、更に稀に三流から一流に進む者が現れる。但し四流から三流になることは殆ど無く、二流から一流への転身も先づ以って期待出来ない。つまり五流から進む先が四流か三流かが分れ目なのだ。よく御勉強をすれば四流にはなれる。その仕事こそつ無くうまく運べば二流にも達しよう。この為には、学界を眺めて得たにもせよ、何程かの view が要る。自らの view を五流のうちに掴んだ者は、四流を経ずただちに三流となる。その view を paradigm にまで育てることが出来れば、こゝに一流が出現する。一つの流派創始の意を匂はせても「一流」の名にふさはしい。国語学史で一流学者の例を挙げれば、本居宣長だ。〈言語〉学者にある「今更宣長でもあるまい」と言ふ手合ひは、今に生きる宣長の paradigm が全く認識出来ない又はそれを知らうともしない輩だ。

もしこのやうに見てよいものなら、二流と三流とは共に一流より下、四流より上ではあっても、互ひの上下は比較不能といふ訳だ。五流は評価のランクではない。五流の者がいつ四流や三流になったかも、他から眺めただけでは分りにくい。この分れ目は多分に当人の覚悟による。研究者の卵は須らく三流を目指すべし。三流研究者多数の存在こそ学界に活気を生む原動力だ。二流何するものぞ。

この一篇が蛇足だから、以下は蛇足の蛇足。

学問自体が論理的なものとしても、研究者その人は大方論理的ではない。珠に事象科学では、どんな偉い学者でもいつかはその所論に誤りが見つかる運命にある。それゆゑ偉い学者とは、驚くほど多くの研究者が騙され続ける説を唱へ出した人を謂ふ。一流研究者は偉い学者だけれど、その逆が必ずしも成り立たないのは明らかだらう。研究者にとって、

何をしたかは無論大切だ。それ以上に大切なのは何をありありと見たかであり、見るわざそのことが創造であるべきだ。(見た上でその検証に努めるべきは言ふまでもない。怖いのは自分の見方に自分自身が騙されてしまふ事。)

世界の見え方が違って来るやうな、物の見方—これを新人に強く希望する。どうか目から鱗が落ちるやうな思ひをさせて貰ひたい。〈業績〉を発表物の数で計る当今の仕来たりも厄ひして、世には早く二流にならうとする秀才四流のいかに多いことか。